謝辭にかえて

八波則吉

本誌が第二百號の記念號を發刊するに方り、先輩諸氏が公私多忙の際、わざ〳〵玉稿を賜はつたことを雜誌部長として感謝します。

かく申す私もまた同窓の一人で、本誌の第三十九號から第六十七號までを、生徒として愛讀した者であります。當時の本誌と現時のそれとを思ひ比べれば「龍南よ、御身も隨分變りましたね」と言ひたいほど、內容形式共に變つてゐます。

當時の本誌には、卷頭には大抵校長の式辭か訓示、さなくば教授方の論說や雜錄などが光つてゐました。さうして生徒の作にも堅い論說が多く、題材は歷史上の考證か科學上の研究發表が大部分を占めてゐました。紀行や美文・漢詩・和歌等の文藝物も無いではありませんでしたが、今日の所謂創作―紙面の大半を占めてゐる小說や戲曲などは、藥にするほどもなかつたやうです。而も文章の全部が豈に夫れ然らんや式の文語文でした。それも其の筈、當時の作文といへば、唐宋八家文か、正續文章軌範が模範となつてゐましたもの……。何しろ大した變りかたです。

しかし、變らないものもあります。それは、第一本誌の名が「龍南」を冠してゐて、本誌に出る文が、近くは龍山白水、遠くは金峯又は大阿蘇の靈峯を背景としてゐること、及び校風の剛毅木訥が思想の根柢を成してゐることなどです。流れてはまた根にかへる柳かな、温故知新は物の正しい進路です。吾々龍南人は、先輩諸氏の述懷を讀んで、吾々の進むべき正しき大道を自覺せねばなりません。此の意味に於て、私は、意義ある記念號が出來たことを、重ねて先輩諸氏に感謝するものであります。